

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第155号

草創期の
柿生中学校 - 15

柿生小学校の移転 その2

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

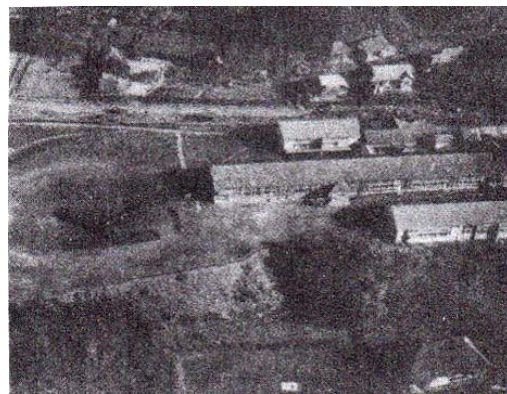
◆柿生小学校の校地と校舎の譲渡◆

柿生小学校の移転について、中学校から働きかけたことは一度もありません。移転はあくまでも小学校の独自の判断で決められたのです。ただ、昭和 31 (1956) 年に移転計画が明らかにされた段階で、当時の 3 代目校長磯岡寛先生が、移転計画の説明を受け、協力を約束したことは事実です。こうして小学校が移転することによって生まれる跡地は、手狭で増築の余地のない中学校の用地に転用するので、一切無駄は生じないと、川崎市教育委員会に説明して移転の了解を得ることができたのです。翌 32 (1957) 年から片平の現校地の買収交渉に入り、買収が完了して起工式を行ったのは 33 (1958) 年秋の事でした。それから半年強の時を経て、校舎が完成して小学校の移転が完了したのは 34 (1959) 年 5 月 15 日。同月 18 日には落成式典も行われました。

移転の相談を受けた磯岡寛校長は、33 年 7 月に退任。小学校の起工式や落成式典、そして校地校舎の引き渡しに臨んだのは、4 代目校長の榎本西之輔先生でした。先生は 33 (1958) 年 7 月 8 日に着任なされると、なんと 45 (1970) 年 8 月 31 日まで 12 年間にわたって柿中校長を務められました。歴代最長記録です。よほど柿生の風土と柿生中学校の生徒や父母、そして先生方との交わりがお気に召したのでしょう。

先生はユニークで面白い先生でもあったのですが、決断力もある先生でした。柿生中学校に正式赴任に先立ち挨拶にみえた時、応接室に通されて、見るとテーブルの上に団扇が 1 本置かれていました。取り上げてみるときれいな映画女優さんの顔写真がありましたが、その顔に万年筆で眼鏡と髭がつけられていたそうで、先生は『三十周年記念誌』に自らこの事実を書かれ、最後に「随分面白いところだなと思いました。」と結ばれています。こう言うことがさらっとお書きになれるのですから、おおらかで気さくな校長先生だったのでしょう。赴任から 1 ヶ月も経たず、夏休みに入った直後、御殿場東山湖畔へ 2 泊 3 日のキャンプに出掛ける当日、生憎箱根方面に台風が接近中で雨脚が激しくなり、決行か延期かの判断が問われました。学校に集まった生徒たちは、行きたい一心で出発だけを願っていたのですが、「キャンプは天気の良い時に行くに限る。今日は延期にする」と決断、数日後の予約を取り直して愚図る生徒を説得、快晴の日のキャンプにつなげて、生徒や父母に喜ばれています。

柿生小学校の校地校舎を譲り受けたのは、榎本校長の就任 2 年目の事でした。念願の広いグラウンドが使えるようになると、生徒たちも先生方も大喜びでしたが、中学校と小学校の校庭には、2m の段差がありました。ですから、中学校の校庭を 2m 掘り下げる必要があったのです。倒壊の危険のある小学校の古い建物の取り壊しを行う傍ら、ご父母、地域の方々に先生や生徒も加わって、中学校のグラウンドの掘り下げ作業を続けたのです。掘り出した土は、新築移転した柿生小学校の一部校地の埋め立て用に使用することになり、トラックで小学校に運ばれました。



昭和 34 年当時の柿生中学校全景

広いグラウンドは、柿中の生徒たちにとって長年の願いでした。これまでは、楕円形で辛うじて 1 周 120m 程度になるグラウンドしかなかったのです。体育祭では小さな楕円を何度も何度も走ったのです。そのため柿中の生徒は他校生に比べカーブワークに優れ、直線で抜かれても、カーブで抜き返して、好勝負を演じていたのです。校庭の掘り下げ作業は長期に及び、残念ながらこの年昭和 34 (1959) 年の運動会は中止せざるを得なかったのですが、翌年からは、広いグラウンドを使って、思い切り走り回れるようになりました。

続く

昭和 30 年代の授業風景
研究授業で見学者もあり、皆真剣な表情です4 代校長
榎本西之輔先生

鶴見川流域の中世
その15

賀勢庄の故地「加瀬」と
鎌倉御家人加世氏について

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

鶴見川下流の左岸には南加瀬・北加瀬・西加瀬など加瀬の付いた地名が、独立台地の加瀬山を取り囲むように分布している。この地域に賀勢庄と呼ばれる天皇家領の庄園が存在したことが、貞応三年(1224)から仁治三年(1242)までの間に作成された、後白河法皇の娘の宣陽門院観子内親王の所領目録(「島田文書」)に見える。宣陽門院領は後白河法皇から譲られた長講堂領や上西門院(後白河天皇の姉で准母)領等を加えた膨大な庄園群であるが、同庄の史料は先にあげた所領目録が唯一である。

古代には加瀬山の西斜面に築かれた白山古墳(推定全長72~90m)と矢上川を挟んで観音松古墳(全長87m)の二大前方後円墳が造られ、その後多くの円墳からなる加瀬古墳群や矢上古墳などが造られた古墳時代から開発が進んだ地域であった。中世前期に存在した賀勢庄はこうした地理的・歴史的条件を背景にして成立したと考えられる。

中世には中世墓や経塚が数多く造営されている事でも注目されている。白山古墳の南東斜面から蔵骨器に使われた渥美焼の「秋草紋壺」(国宝)が出土しているが、同壺出土地と隣接した「越路遺跡」から発見された蔵骨器の白磁四耳壺は、鎌倉で出土するものよりも古く12世紀後半の作成とされている。こうした陶磁器を遠隔地から入手して蔵骨器に使い墳墓に埋納することの出来るのは、賀勢庄の成立に関わった有力者一族であろう。加瀬山の南麓に館を構え、そのかたわらに一族の墳墓を造営する豪族の姿が想定される。

加世を名字とする武士が『吾妻鏡』や古文書・墨書木札等に登場するので見てみよう。加世次郎宗季は『吾妻鏡』建久元年(1190)十一月七日条に、源頼朝上洛の随兵として先陣の随兵36番に塩屋惟守や山田四郎と隊列を組み、建久六年(1195)三月十日には源頼朝の東大寺供養の後陣の随兵として、熊谷直家や志賀七郎と隊列を組んでいる。加世次郎は將軍と主従関係を結んだれっきとした御家人である。しかし、つぎに見える加世次郎は畠山重忠に戦いを挑む安達景盛に率いられた主従7騎の中にある(『吾妻鏡』元久二年(1205)六月二十二日条)。従者(被官)と記されているのは野田与一・加世次郎・飽間太郎・鶴見平太・玉村太郎・与藤次である。加世次郎がどのような経緯で安達氏の被官になったのかは不明である(「鶴見川流域の中世」6参照)。飽間太郎と玉村太郎は安達景盛が守護職を持つ上野国の武士である。つぎの和田合戦と承久の乱は加世氏の命運を大きく左右した事件であった。

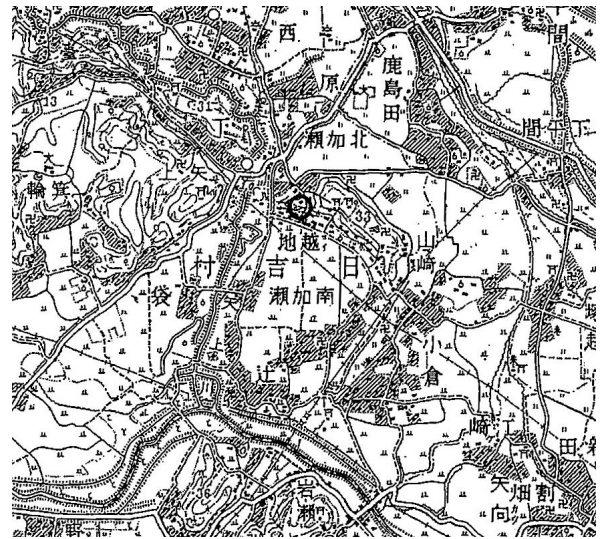
建保元年(1200)の和田合戦では和田義盛に与して討たれた御家人達の中に「かせの(加世)弥二郎」がある(『吾妻鏡』)。弥二郎の所領は幕府に没収され没落したであろう。

承久の乱(1221)における宇治橋合戦は2日間に渡って激戦が繰り広げられ、幕府方の武士にも多くの死傷者を出した。加世左近将監と加世弥二郎は六月十四日の合戦で負傷し、その後に弥二郎は死亡している(『吾妻鏡』)。先に和田義盛に与して討たれた武士も加世弥次郎であった。なぜ重複しているのか疑問が残る。

『吾妻鏡』仁治二年(1241)二月二十五日条に上野国菅野庄の境相論があり、長秀連と高田盛員が執権北条泰時の御前で対決し、盛員が敗訴し所領一円を没収されるが、藤内能兼と加世五郎季村が上野国への使者になっている。先に登場した次郎宗季と五郎季村とは「季」が共通であることから親族と考えられる。上野国は安達氏が守護であることから、被官の加世氏が使者に用いられたと思われる。

2006年に有力御家人安達氏の武家地とされる鎌倉市今小路西遺跡から墨書木札が出土した。墨書木札には文永二年(1265)五月日の銘があり、1番から3番の番に編成された多数の武士の名前が記されている。その中に「三番 かせ□入□□」が見える。この墨書木札は安達氏の宿舎周辺を夜間に警備のため巡回するいわば当番表である。加世氏が安達氏の被官としての活動が具体的に分る貴重な資料である。この墨書木札が記された20年後の弘安八年(1285)に起きた霜月騒動によって安達泰盛一族は滅ぼされ、安達氏に与した多くの御家人達が討たれ、あるいは自害している(「安達泰盛乱聞書」)。被官の加世氏も安達氏と運命を共にしたのであろう。ところが、霜月騒動後も一部の加世氏は命脈を保っていたようで、正安三年(1301)の関東下知状には相模国長尾郷田屋村の田8段余の年貢を数年間滞納したことで鶴岡八幡宮供僧に訴えられて、田地を取りあげられた加世長親親子の事が記されている。これを最後に加世氏は歴史の表舞台から姿を消している。

(つづく)



図版 大正6年測量5万分の一『東京西南部』
秋草紋壺出土地 越路遺跡

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(11)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆柿生地域の初等教育 その4◆

学制の公布以降、猛烈なスピードで初等教育を担う下等学校(後の尋常小学校)は設置されてゆきました。しかし、当初は学年制も学級制もありませんから、先生たちは異年齢で学力もバラバラな子ども達を相手にするだけでも大変でした。その上寺子屋で学んだ経験のない子ども達もいますから、まずは教室の決まり事を教え込み、決まりを守るよう躾けることに精力を使わなければならなかったのです。当然、学習の成果が期待できるようになるには、しばしの時間が必要でした。

まずは、全国的な状況を見ておきましょう。この連載の第7回に、私は以下のように記しました。「記録の残っている明治8(1875)年の各級別の児童の在学状況を見ると、下等小学校の第八級(1年の前期に相当)に全児童の約65%が在籍し、第七級(1年後期に相当)には約17%が在籍しており、全体の約82%が一年生だったのです。開設間もない混乱期であったことを割り引いても、この一年生の数は多過ぎます。なお、先生が子ども達を躾けることに追われ、満身に授業が出来ない状況にあったことが推察されます。2年後の明治10(1877)年においても、第八級の在学者は約49%とほぼ半数を占め、第七級が約19%と合わせて約68%を占めていたのです。」

では、生徒即ち子ども達の学習意欲をどのように掻き立てたのでしょうか。それが学力検定試験でした。現在とは違い、当時は学習の到達度が一定水準に達しないと、進級は認められず原級に留め置かれたのです。読み方、書き方、算数の3科目の平均点で60点以上が必要だったのです。初期の下等小学校は、八級から一級までそれぞれ半年で学び終え、4年間で学ぶ仕組みでしたから、試験も春秋の2回行われました。しかも試験会場は生徒たちの通いなれた自分たちの学校ではなく、近隣のいくつかの学校の生徒たちが一堂に会して受ける形が一般的だったのです。

柿生地域の場合、上麻生村の東林寺が会場となって「小学生徒試験」が行われたのです。下麻生学校がようやく自前の学び舎を建てて、民家の物置の2階から脱出できた明治10(1877)年秋の例を紹介します。片平学校、上麻生学校、下麻生学校の3校が一群となって、試験が行われたのですが、受験者数の関係で、試験は3日に分けて行われるのが常でした。この時は、初日の11月17日に片平、上麻生、下麻生3校の八級と七級(現在の1年生にあたる生徒)の試験が行われ、2日目の11月18日には片平学校の子供達だけを対象に六級から一級までの試験が行われ、最終3日目の11月19日は下麻生学校と上麻生学校の六級から一級までの試験が行われたのです。この年3校の生徒数は、片平学校が男児62名、女児38名の100名、下麻生学校が男児51名、女児24名の75名、上麻生学校が男児28名、女児13名の41名でしたから、受験者は計216名でした。

試験の採点はその日のうちに行われたらしく、合否はその日のうちに伝えられ、別掲のような在籍級の卒業証書が授与されたのです。図1は、下麻生学校の池田又次郎さんが第三級の課程を無事クリアしたことを卒業として認めた証書です。この時又次郎さんは満

12歳と11か月ですから、逆算すると、彼は明治7(1874)年秋に9歳11ヶ月で入学し、順調に半年ごとに級をあげてきたことが分かります。続いて図2は、片平学校の安藤恒之助さんが、11月18日の試験に合格して二級の卒業を認められたことを示しています。実は安藤恒之助さんの証書は、10才9ヶ月の明治8(1875)年3月に、八級を卒業した時の証書から二級卒業までの全ての証書が保存されています。入学時の年齢が高かったこともあって、恒之助さんの学習の進みは早く、明治9(1876)年5月の試験では、六級と五級の試験を続けて受けることを認められ、事実上五級を素通りして四級に進級したことも分かります(図3)。

全国的に、八級と七級(後の一年生)に留まる生徒が多い中、柿生地域では時には飛び級する生徒も出るなど、半年ごとに進級する生徒が少なからず存在したのです。 続く

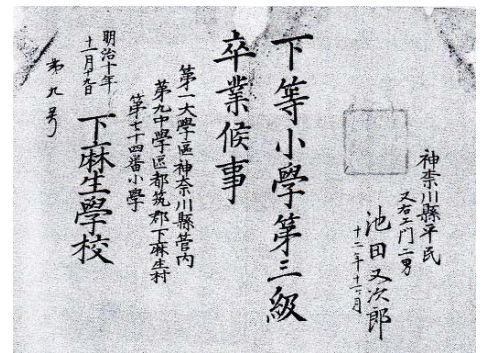


図1 池田又次郎さんの三級卒業証書
明治10年11月19日とある

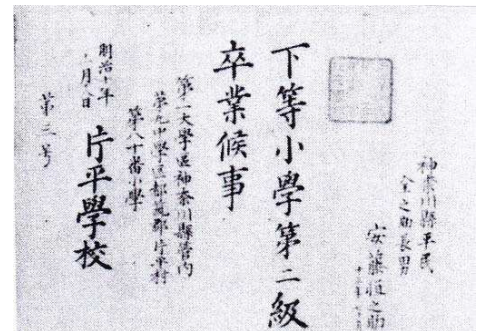


図2 安藤恒之助さんの二級卒業証書
明治10年11月18日と読める

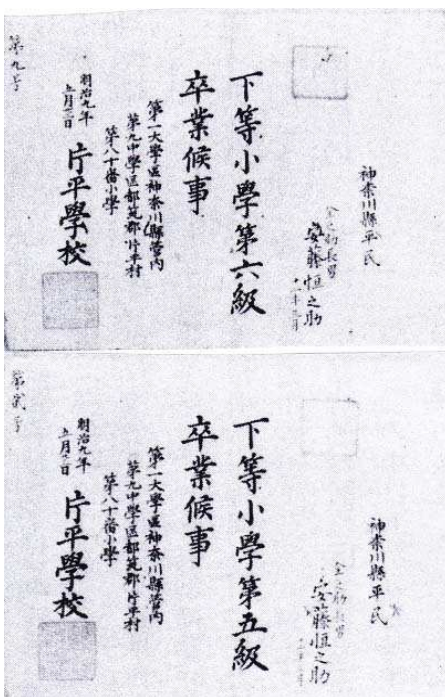


図3 安藤恒之助さんの六級と五級の卒業証書
六級は明治9年11月15日、五級は11月16日と読める

寺社の歳時記

麻生不動院のだるま市について

不動院住職 森光彦

麻生不動院のだるま市については、過去に小島一也先生の遺稿(柿生文化第92号)において詳細な解説がありましたが、今回住職の立場から一言申し上げることで、長く続いてきた麻生不動院のだるま市を知っていただく一助となればと考え寄稿させていただきました。

1月28日は、初不動の縁日であり、毎年恒例の麻生不動院だるま市が開催される日となっています。縁日とは仏様と縁(ゆかり)が深い日のことで、年が明けて初めての縁日はその1年で最も深いご縁が授かるとされています。麻生不動院では、この日に護摩を焚きご参拝の全ての皆様の所願の成就と心身の安楽が得られますよう祈願しています。

麻生不動は昔から「火伏せの不動」といわれ、火難から人々の生命や財産を守ってくれるお不動さまとして信仰されてきました。護摩の梵風によって加持されたお不動さまの御札を火気の近くに貼ることで火災防止の戒めにされてきました。また穴あき銭は、囲炉裏の自在鉤につけると、1年間無事故で暮らせるといわれてきました。現在では囲炉裏や自在鉤を使っているお宅はほとんどなくなりましたが、お不動さまのご利益を求めてお姿札や穴あき銭を今でも多くの方が買い求めます。最近はお札は台所に貼り、穴あき銭は財布に入れる方が多いようです。

縁日にはたくさんの参拝者がみえるので、それに合わせて露店も多く出るのが一般的です。麻生不動院でだるま市が立つようになったのは明治の頃と言われていています。小島一也先生の遺稿(柿生文化第124号)によると、王禅寺の露天商組合「揚屋一家」がだるまを仕入れ商ったのが始まりのようです。現在のような賑わいを見せるようになったのは昭和になってからで、近郷近在から多い時には5万人前後の参拝者が集まるようになりました。おでん、綿菓子、農機具、植木、金物などの露店が並ぶ中、だるまを売る店が特に目立つので「だるま市」として定着しました。他地域でもだるま市はありますが、通常年の暮れに開かれることが多く、1月の麻生不動は「関東納めのだるま市」としても有名です。



昭和30年頃のダルマ市

本年はコロナ禍ということもあり、当山では規模を縮小しての開催を目論み準備を進めてきましたが、新型コロナウイルスの流行が収束せず、年明けから二度目の緊急事態宣言が発出されたことを受けて、残念ながらだるま市は中止となってしまいました。初不動の護摩供養は例年通り厳修いたしましたので、護摩札や御姿札、穴あき銭をお渡しすることはできましたが、露店の出店がなくなったことで賑わいはすっかり影を潜め、新しいだるまを求めることもできませんでした。楽しみにされていた方々には大変申し訳なく思っております。

本年の初不動護摩供養においては、皆様の所願成就とともに悪疫退散の願いを込めて祈願をいたしました。皆様におかれましては新型コロナウイルスの猛威は未だ収束をみせることなく、感染に気を使っている生活が続いていることと存じます。皆様が元の平穏な生活を取り戻すことができますよう心よりお祈り申し上げます。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

11 **4月** 3・17・24日(毎土曜日) **5月** 9・23・30日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時(新型コロナウイルス禍に伴う緊急事態宣言発令中は休館です)

第19回 特別企画展

写真で見るふるさとの原風景

戦後における村々の変貌の過程や、各地の開発の様子など、柿生村地区村々の変遷の様子をお楽しみください。開催日程が変更になっていきますのでご注意ください。

期間 4月24日(土)～8月28日(土) 会場 柿生郷土史料館特別展示室